〝便利〟になったけれど、〝幸せ〟か？

松下幸之助から突き付けられた質問

雪道に足を取られ、喘ぎ喘ぎ登った身延山の思い出も、少し遠い日々の話になりつつあります。みなさん、その後、お変わりありませんか。山梨も、桃の時節が去り、青葉、若葉に命の息吹を感じる日々になったことでしょう。今年度の研修も、最終の段階に差し掛かりました。お互いにこの一年間の歩みを振り返りながら、良い形で、学びを締めくくりたいものであります。

生きる基本を教えてくれた人

さて、今回は、「便利」と「幸せ」について、考えてみたいと思います。

私は、松下政経塾の創設者である松下幸之助の考え方に大きな影響を受けています。かつて自分の出身大学で講演した時、「大学で様々な知識を学びました。しかし、〝人間として生きていく上での基本〟について学んだのは会社に入ってから。特に私の場合は、松下幸之助から学びました」と話したことがあります。それは、私の偽りのない気持ちです。新入社員のころ、松下幸之助の考え方が、実に新鮮で、生き生きと私の心の中に入ってきました。以来、松下幸之助の著書を、ほとんどすべて読破したのも、私の心に躍るような感動があったからです。

その上、松下政経塾に勤務した時代、松下幸之助に直接仕える幸運が巡ってきました。私の人生における最大の、そして、最も貴重なチャンスでした。もし松下幸之助の思想に出会わなければ、私の思想や考え方は、ほとんど耕されなかったのではないかとさえ思います。

「君、大学出ているのやろ。教えてくれんか？」

その松下幸之助から、ある時、一つの質問を投げかけられたことがあります。「君は大学を出ているわな。僕は小学校の四年の、しかも中退や。だから、大学出の君にぜひ教えてもらいたいことがある」と言って投げ掛けられた質問です。

「世の中、昔に比べたら、びっくりするほど便利になったわな。しかしな、こんなに便利になったのに、どうして人間は幸せになれんのや？」。

何気ない質問ですが、私は、答に窮しました。そして、今なお、答に窮しています。理屈では答え切れない難しい質問です。見方を変えれば、私が松下幸之助から与えられた生涯の宿題かもしれません。

私の子供のころと比べて、世の中が便利になったことは驚くばかりです。子供のころは、家事の大抵は、手仕事でした。ご飯を炊くのも、洗濯をするのも、掃除をするのも、農業をするのも、移動するのも、連絡を取り合うのも、すべて、手か足か、体全体を動かさなければできないことばかりでした。今は、すべて機械が代わってしてくれます。

※裏に続いています

本当に幸せになったのか？

スイッチを入れるだけで、ご飯を炊くこともできるし、洗濯もできます。移動の手段も、あっと言う間。車があれば、歩くことさえ最小限で済みます。何と便利になったことでしょうか。最近は、車の運転も自動化が研究されていて、実用化の日も近いそうです。車に乗れば、何もしなくても移動できる。それほど便利になって、「楽」は実感できるでしょう。しかし、便利になった分、「本当に幸せだな」と実感できる人はいるでしょうか。

私達のほとんどの努力は、「便利な社会」を作ることに向けられてきたのです。そして、「便利な社会」と、「幸せな社会」とは異なることに、ようやく気付き始めてきたようです。私達は、これから、「本当に幸せな社会」を作ることに努力しなければ、「便利になればなるほど不幸になっていく」というまことに悩ましいジレンマに陥ることになります。

山梨では、リニアーの開通が、地域にとって〝起死回生のホームラン〟のように期待されています。リニアーが開通して、東京との間があっと言う間に行き来できる距離になれば、山梨は劇的に発展すると期待する向きは少なくありません。しかし、敢えて言うなら、「便利と幸せは違う」。本当は、「もっと便利になる」ことよりも、「もっと幸せになる」ことに力を入れなければならないのです。

身延山に歩いて登った幸せ

身延山に登った時、ロープウェイで頂上まで上がるのとは比較にならないほどの苦労をした記憶は、まだ新しいところです。ロープウェイなら、たった七分で行ける便利な方法があるのに、喘ぎ喘ぎしつつ、三時間も掛けて登りました。不便な道を選んだにもかかわらず、私達は、「身延山にみんなで苦労して登った幸せ」をかみしめたのです。そして今なお、「幸せな思い出」として、みんなの心に刻まれています。

『夢甲斐塾』は、「どうすれば、山梨の人達が幸せを実感できる地域を作るのか」といったテーマに取り組んでいるとも言えます。

もちろん、経済的な成功もまた、幸せの一要素であることは否定しません。食べる物にも事欠く貧困の中で、幸せを感じることはできないからです。しかし、経済的に満たされれば、幸せが手に入ると思うのもまた、大きな間違いです。人は、どういう時に幸せを感じることができるのか？

手間を省けば、心も省かれる

普段の生活において、「手間を省く」ことは、ともすれば、「心を省くこと」であることを十分に承知しておかなければなりません。レトロ食品やインスタント食品がずらり並ぶ食卓を見て、家族は、幸せを感じないのです。「また手抜きか？」。それに対して、手間暇を掛けて家庭で調理した料理が並ぶと、「贅沢」と言って、家族は幸せな気分になります。

私達は事を始める時に、「どうすれば幸せを実感できるか」から思考を始めるべきでしょう。〝山梨県は、日本一幸せを実感できる地域〟。そんな理想を話し合うことも、時には必要ではないかと思っています。

『夢甲斐塾』塾長　上甲　晃